

編輯後記

△大東亞戰爭正に熾烈なる時、明治の佳節をトして東京に大東亞文學者大會が開かれた世界の二大強國を敵に廻し、國運を賭して戦ひ乍ら、日滿華蒙の文學者が一堂に會して、アジャ文藝復興を議した。大東亞の盟主日本の餘悠粹々たるところを見よと云ひ度い。

△第一戦の大戦果に應へて、人と物との不足に堪へ乍ら銃後の管みに餘念のない中に、文樂の太夫、三味線、人形の三葉が、これ以上人員の縮少を見ては、操芝居の成立を不可能とするギリ／＼結着の線によく踏止り、祖先の残した世界的な文化戰の爲めに樽下古靱太夫以下が一團となつて奮闘してゐる様は、雄々しいといふよりも寧ろ悲壯である。文樂の興廢は質の問題よりも數の問題にかゝりつゝある。

△別項の通り因協會の第四回技藝獎勵會が催され、前回の不振を挽回して「蟻洞賞」に價する優秀な成績を挙げたものとしてつば

め太夫、隅若太夫の二人を得たことは誠に心強い次第である。

△巻頭に掲げた「淨瑠璃雜考」の筆者、秋葉芳美先生は今更茲に御紹介甲上上げる要はないと思ふ。廣汎な資料によつて精密な御研究の一つ／＼は演劇研究家が見逃してならないものばかりである。最近岩波書店から出る「國書解題」と改造社から出る「歌舞伎序説」(守隨憲治先生と共著)の御仕事に御多忙の最中に於て特に本誌の爲めに御執筆願つたもので誌上を借りて深く感謝する。

△太宰先生の「佛蘭西古典悲劇研究」の後を受けて「コルネイユの理想」を本城格氏が執筆された。右は京大に於けるコルネイユ研究會で發表された研究報告であつて最優秀なものとして太宰先生より推薦されたものである。先生の「佛蘭西古典悲劇研究」と共に併せ味讀され度い。

△同人野間光辰、祐田善雄兩氏の病氣全快して「引窓」の解註と「甚盤人形」とに夫々遺著を傾けられた。

(編輯部一林、大西)

淨瑠璃雜誌 第四百十四號

(昭和十七年十一月號)
(毎月一回三十日發行)

●定本 一部 金五十錢
●半部 金三十圓
●十二冊 金五圓

○御注文は一切前金の事
○雜誌發送を以て領收證に代ゆ
○外國送りは一冊に付郵税十錢を要す
○振替は浪花名物淨瑠璃雜誌社。
○座穴阪二三九二八番

廣告料

普通	一行	金三十錢
二等	一行	金二十圓
一等	一行	金二十圓
特等	一行	金三十圓
○特等は二頁以下の需に應ぜず六回以上の特約には割引す		
○製版を要する時は其費を申受く		
○廣告料は總て前金の事		
○一行九ポイント活字		

發行所 樋口虎之助
大坂市西區江戶堀下通四ノ三〇

印刷所 坂口秀吉
大坂市西區江戶堀下通四ノ三〇

印刷所 高尾印刷所
大坂市西區千本通二ノ三二

發行所 淨瑠璃雜誌社
(西大 第四九〇)